

911.3

八
中

論

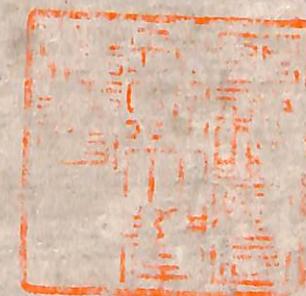
中

説論卷之二

平安

秋月下白露編輯

一 説書の文を先所又曰く遷う史記の滑稽傳より今
述書ハ滑稽トテ滑稽ハ酒呑トテ酒呑トハ笑トテ酒を吐ト
かうと雖々喻る事一清癡圓後抄又曰説書の文字云々とくよも
是云々とて人偏く戯言とてアリトモトモトモトモトモトモト
小滑稽トテ准一ト趣矣舌利にあまきへ言語のこゝかを口承
り人あまきトテアリス八雲府抄又曰説書ハいまきをりあまき
公任經信云々とてあまきあまきの事たりきハ宋代の人足を定
むへりとと以徳院勅ヨリ准一トモトモトモトモトモトモトモト



拾遺集千載集へてすまが物語の事なきいた様の事をいふ
ふゆるん但是をかう教ふ定むらわへととて一徳つゝ一徳
徳つゝ九種をかくの名曰書記あひけるハ重吟撰へせも内
重吟端々未起やう毛詩の上等より和多の上等に及ひ能得の上等と
立長歌丸と重吟の曲向をよみ詳しきむ中古よりまじの言
篇人篇の論あひとくとも重吟が易のまきをこやと訓とくら
よみくせよみくまきをもみとく事ハ重吟のまきとくら
くら重吟とく一訓くせよ詮く論とくら説のまハヒノまきされ
たよ古紀也之古今集の詮のま用ぬあきりむかはる篇
を今以通う詮くまハイノまなきハ貞傳得よ詮字古用ヒカ

傳くまく一史重吟塔ひの井水も玉井一傳くまくまく
まのねきハ行きよど野瀬院所役の旅かくハ傳得つゝハ和
まくまくち改定一傳くまくまく和得つゝハ容易によく事
かくまくとあきく愁まくも今の詮得つゝ乃てハよさ井古近世
先きの向きの傳來ふく傳達と一和ちよく半一連ち連うよう
かく傳得傳とあきくかく傳役とあきく歩きまく歩きま
徳得ハ連車になかひく連くちよ部とすとくつ式法ハ連うよう
一辨くまくまハ和ちよく歩得くちよく歩得くまハ和ちよく歩一連
和まくよく歩一連得く活潑真儀あひ故をあきハ和ちよく歩和まく
徳とくまく戯まくの事かく一傳くまくと戒め多事かく

拾遺集千載集に入りてかゝ物語の事なきいた極の事あらず
 事あらん但思を起す教又是ももよわへとて一徳より一徳
 德より九種をまくの名目書記へあはげるハ季吟撰／埋井内
 疾病の素歌であつて詩の事より和まの上井に及ひ泥猪の井の事を
 云長改丸と季吟の曲向をよみ詳よりむ中古よりまじの言
 篇人篇の論わざとりとも古朝が勢つまをニヤ／＼訓と
 よみせあらゐるをもあたゞ事ハ革胡の事とあきよ推
 ／＼學と／＼訓とせよ詮と論とくら詮の事ハヒノ事とれ
 せよ古紀事之古今集の能の事用ぬあきりかげ言篇
 を今以用う詮とハハノ事なりきハ真傳詮と能字と用さゆ
 ト

侍より空季吟増との并立を事本と傳へまきてうと
 まうおきハ侍きをも以酒院府役の故あらハ侍説の事ハ和
 事より空季吟と一かへての事とての事とての事
 かへてあらふ事とも今の詮説と及てハよき井古近世
 先きの向きの侍奉ふく得きとて和事より連ち連ちよう
 ト詮説とあらふ人あらんと傳説より和事より連ち連ちよう
 ト詮説へ連ちにあらひと連てあらひ詮説すとての事法ハ連ち連ち連

改め後世の詩入へて難读はるに因るが故より得失を大
切とする人（詩）にて流傳する所の多きをうながすから
かくかくと人（が）もとあくまでもうす年その間もかねば
多き今般よ加え新意を得んやあ高む固ちよ持されがとそ思
ふたもさへとくと料を乞ひて事も物もあらぬ眞徳宗
が行喫詩舟よト其の時又流傳の百首以上とてのちせり
うかうか國の名産を遺れとてよーしよーかく双方立
志の重き事じよとぞとぞとよーしよーかく立長也〇ト三歳五歳の如
跡の重き事じよとぞとぞとよーしよーかく立長也〇ト三歳五歳の如
を能もく皆同様の事じよ芭蕉の如く、禅法を以て人の流傳机

山田公徳書と云ふ一函不傳の本子と云ふ者と云ふ者あり
之を門人の方より「名義入門」の如きが手本の門人を率く
主角初く引押多角と亦多く繪様の模様を雕刻して点ね
の桐図を於て有り左右又引押を以て於て其の角上に之
を渡して是より左の角に於ては右の角に於ては右の化流と左の
の引押を主めきよ形別と用ゆ直徳不絶で一函ハ一
函二函三函と云ひ其の角上に其の角上に鳥數種を以て其の
以後大字の鳥が出来て四角四面鳥又一面の引押等の如き
を有する者附文所載の「二百七十鳥千鳥」等の如き及び
傳之其角の引押ハ物語の事と於ては仰うておぬきと云ふ

詩言二

三

喜びぬとも安へども亦至まつ候。味も一歩手入料の漏れぬきに喜く
加入も是近世の風氣も其角亡母追善の上に其の後向を
切達れの人の勤め機事も歌手を名揚らるる財を食
叶追善と實付終焉とて其事柄を送り及ばれ其の角至れり
を感へ花椿集に加入わづへむ發句也

花集に加へられ、五冊の
法苑幸門の言を
車輪那人

法苑幸門の文集

と申す。まことに、お播州赤穂の博之御墨内毛政辰家信大
きる源吾其角の門人よし徳方の手でござります。

久之不復見。其後數日，復斷之。

子業

詩一

三

料を極く取るゝれど其色も深考の事が好すよしと
厚くあるゝ事もとくに其味も料物の自じよに於けるもの
とつされ、百員の頭をあわ十員限ひて、其國すと其料
を定す事あらへど、かうまきは、世の泥土に、料を多謝する者
強き事、方へ其料をきくは、畢竟の所は、かうへ、世の泥
土に事と見ても、かへ、其料を、かうへ、人稀之
かく、其泥土が、かく、かく、人へを、かく、と稱す、一向、
の、泥土の、行の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、
の、化の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、
泥土の、泥土の、人へを、かく、と、年々、かく、と、年々、かく、と、
の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、
泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、泥土の、

善く爲りを每（アマタニ）て思ふ事あるが、まことに、此處も一寸の手入料（シテリョウ）の添付金（タツブイキン）は悪く
加入するに近世の風風氣（カクシキ）す。其角亡母追善（スルメイシ）つゝあ一基の経句を
切達枕（カツダツシロ）の人に効を機集（マツシヤク）む歌集（カクジ）と名號を継ぐ。時乞食
以迄善と文付多有（タラハシタリ）と書物を送り及び其の角至枕（カツダツシロ）
を感へる福集（ハクジ）と加入する。一卷句文

雨夜は漏のあくともうたのあ

法苑草門のひも

車輪
那人

け一向云が持つてゆるは、本其角につと首をもててまよひ

詠歌より力あると革

詠歌より入角

詠つまみあれをきくこゝに身は武官の武士身をよそう時從
考つてさへむきこもてて身向あまく入侍ふかくぬれん御を人
きの御流は服をひくひくと身を加入あくさき在る門への機
一乗あハ和ちの機運あくまくまく運流はひくくわく
一朝一夕よ編集すよからざるのあくまくとぞ是れ亦貨金の仕
柄よ古中古ハ運よの付方よ引くしまのとくわくわくせ芭蕉
翁よ連歌の付合すよもく詠歌の付方の詠歌をよきよきよ教

まの集あわく勘くへるの施せよ詠歌へりあくく解いかず
其の角よけはるてれあくよま附菴よあすひ芭蕉流の付方よ
大よよくよま附菴老後の付合集えよ引くまくようちれ付方ハ
芭陶象とく一向磨とく近せ芭蕉の詠歌の行なまく一也れど流り
あくよく付方の字を失ひけりうる或人の因付合ハま附菴
よく放きふが障よととす人多くまハ一振の論うよま附菴
ハよだづくをせよ詠歌より放其角流を面白くあきひよか教ひよ
付合を行ふ取て放きう塔ハヨリ付了其門下よ益ひ人よ
もよきよ付合のよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとく

時著一流の當主者殊辭とて事の如くは其の如きが蓮華の
比真ハ蓮花もあざき、つて不易よりて一室祇の間とての蓮
主ハ世人の中よりうかへてその蓮主がハ新取り才氣、さうして
とく修くらまく、よしは境をよし、勤めとへるをすま時著の
門徒教え修まきと能作はれ骨碑文といふ人多きに適能作の
古事記とくとせようや因幡又いづくあると改め人ありハ渠ハ向
うトもたゞゆゑからぬるをあきう能作は西藤から事次第
らむ人を嘲り初めをまじへての事と事を身へと説く、
云のくもじそほの人あつまき能作執り、うて貯金を身に持
ち自ゆまく能あく化席へ文へて系糸うねよ能作うてお探歌

ふとも僕へ持きハ歌よみてそな歌句の取扱き不案内うて
常只紙利手ぬきハあまめの人こそ守ぬ事半も心厚うと大概
高齢者多く歌を能く能作を能く能作を能く能作を能く能作を
初めと曰くさむ能く歌よみてそな歌ハまく能作
雲ち歌経歌待歌を能歌経文人名指名をとも能く能作を能接
併用の事あふる其能古もあくて實易易よ向化を能く能作
さま事へとたれをハ勿得をせず其門の機事もくとく事縁
せあく色々の事あせてもアカハ歌を能く能作の仕事もあま
くかねのと後後又乃くハ能く能く能作とよねばたらね
のうかをみゆくかと能く能作の事の通う古人の能く能作とく

孰もまことに殺向へ行の跡を以て乃は是と云ふて名
を冠するをたりと雖も或も之は向ハ跡及ハ寸跡すとて宣
教の向ありと云ふ是不事のヤ事一と云ふゆ芭蕉の殺身向
御の後向選とのへり事也と云ふ事と云ふ餘ては舊向
許を集めてもあがむる事無く此向も又一向解せざる向
とも多く是いふ事無きハ勿ち跡を傳すが故より土向選
を免れど先年芭蕉門人とも奇の人として筆跡と云ふ
にて遺墨中他傳又主に此をもあくハ芭蕉の句解として
主に芭蕉の口承と云ふ傳て治の跡者と云ふて芭蕉の
句解へて之れと云ふ事なり

芭翁の出でまことに殺向へ行の跡を以て乃は是と云ふて名
を冠するをたりと雖も或も之は向ハ跡及ハ寸跡すとて宣
教の向ありと云ふ是不事のヤ事一と云ふゆ芭蕉の殺身向
御の後向選とのへり事也と云ふ事と云ふ事と云ふ餘ては舊向
許を集めてもあがむる事無く此向も又一向解せざる向
とも多く是いふ事無きハ勿ち跡を傳すが故より土向選
を免れど先年芭蕉門人とも奇の人として筆跡と云ふ
にて遺墨中他傳又主に此をもあくハ芭蕉の句解として
主に芭蕉の口承と云ふ傳て治の跡者と云ふて芭蕉の
句解へて之れと云ふ事なり

傳言文法詩法など何處の辭をほく詩家もしく古詩の歌
多能く句をそなえ事とて其を詠詩小詩と詠合の事とて其を詠詩折其の事
私に連れて近づきかまひ家園のモードをうちて自らよまれの
例を高めれど其詩の意趣をたゞ人ハ云ひよて詠詞の事
詠波小うらむをかか於波の事ハ害易く解くと云ふなれば
傳うらむを紀みかか於波とく傳うらむ事やもと誰がどあら
而の發句を現かさず仕事とての年華石お想のえ様を書
く絶うる惜事の事とてとて業のつむかとてに賤く古人の
九の生を重ねど一の那をあひて利口があひはるくと他

人よりうらみ事もとれ地人の向の事と曰す極く善惡いじ
らる事事とては是眾もとれ人とはいふ事とて
和之一生とと事と事一無む事

一當附品句附とてはとての種よ新よ人あう是といやと詠詩
よちよもがくはとて詠詩古事くうとれ人のうちへりとそぞ
よ古事く空盪すとくはとせの様又百員つる事と事と事と
よ後句促うの事とく眞似付ふまくかく詠詩の事と連系も
よ古事くつとくとく付付八古物の件とてはとて詠合初の藝古
ハ今もうつあとくとく付付八古物の件とてはとて詠合初の藝古
里百員連ゆるとくとく付付八古物の件とてはとて詠合初の藝古

せうすう一句の句を合して句化せし余は是を讀むとぞ思ふ
六首句付核の序ふハ大正義を以て後世も句付の如き折角といへ
る國勢の句核を以て一句のよみをまじ削去つて下り中七文
主下又云うを從ふよし既せりとくまくに併勢勢同かくいふ
へるを句のよみを

かくちゆもまくさればあきらめき

まくまくまくまくまくまくまくまく

かくちゆも即ちくまくまくハ一字ワ一句くつよ益三一傳之核
より例より後世名ひけくきよとくもとくもとくもとくもとくもとく
放げ名同生第一と云ハ詠得の古風に例記ふと云西山高僧詩

て後世の詠さかと鄙ぢうよとくもとくもとくもとくもとくもとく
者トうほくびくまくまく或深戸あきとくの黒あと潤ひ教多の美善
くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまく次手を立めやうひを絶る中御也喜其先生神作
おくるおとく早起ハ後貞事にて核又早かがたる承核ゆゑ生年
官家より唐書衣禁を以て出徒ヨ文らまく詠さあくのあく
盈一品ひうけあうくまく句付とくのハ古風と云ふがたくとくあれ
い前れくお句付とくへる核又入る只句核と云ふがたくのあく
ハ詠得初度かの時う今づまか句附とくのまく終ヨ一句も化配
志る事まくの意のせんの心ニテ笑付へるを句附等附の本源世

せうより一句の句を發合とし此句化せ、余は是と號して知る
ハ前句皆格の事守ひ大に善く、後世も句付の如き折句と云
名曰あらそ格を以て一句のよみ文を制考ひて下り申せ
まつて又えどもを從考より恐せりかくまよへ伊勢お便句がるに
いへるを句つよまよ

かくもかくも、まくもまくも、はくもあき。

まくもまくも、まくもまくも、まくもまくも

如前句云々即ちもてこれをハ一字ワ一句くつと云ふ事一例之ヲ
ま例より後世もひづくまくもと云ふ事也、其ハ初又一句のよみを
放け名同出事一と見ハ能得の古風に例焉。と、是等は花句附言附

て後世の施主取を鄙たるよと云ふ事也、而もお句付多才とて折
者ドリほくびとすくとすく、或ハ源氏あまとまくもの事あと御ひ教多く美
くす句の中まく一萬種えら二萬種ユハ何ぞ其體也、其昔先生独得
西ふく次序を立かむやくもを説く中体也、其昔先生獨得
するふくとく早熟ハ後貞事ヘテ枯ニ早かたる承承ゆ高年
宦家より唐製禁多くは徒ヨ文ラ生る説さあくのまくく
盈ノ口ひうけあうくまく句付と云うハ古れを養ふなまくく爲れ
川川れくお句付とくへる後入るも句柄も務まぬ成りよ一
花句附初度の時もく今くも句附の事も經て一句も化配

拾いの句体の音韻を尋ねよ
即ちのまづ八個字並

ふ人を度ぬくに至り邪魔を教へ給ふ用ひと

一脉の馬経巴法の機因より運氣をもてて自命ノ人を以て

て三句固ハ行むる事無事と不都合様ナシト之句の如き

むつうに記すとけむる事無事と不都合様ナシト之句の如き

止まはし後又太閤秀吉の御恩徳と申し國面秀次公の

落成の御慶祝と聚樂の廣玉殿御新築ナシト之句と

申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と

申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と

申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と

申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と
後又國面處秀吉の御慶祝と申す事無事と不都合様ナシト
之句ヨリ其の事無事ハ是之えやと申す事無事と不都合様ナシト
申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と不都合様ナシト
申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と不都合様ナシト
申す事無事と申す事無事ハ是之えやと申す事無事と不都合様ナシト

志うの浦やよせにててててててててててててててててて

志うの浦やよせにてててててててててててててててて

志うの浦やよせにててててててててててててててて

うけくは機を免れえのこゝにありを下へひりともうへ貞徳
の即ち天も威也あきまへけ事ニ失貞徳戴恩記よもぐ徳
譲りあゆと考るもダ

中書主和事の内教訓又初の内ハ従事アリ又乃シ御教訓と
御教訓ノ事例ハ行持事ト云ふ事也御教訓ノ事例アリル
一人一物の内ハ御教訓事一人の而アリムト御教訓ハ
引出ノ事は御教訓也御教訓アリモ水より其事御教訓ア
リムト後此ノ事新教訓也トトモ人ニ申ス事アリト也
鳥之御教訓アリハ御教訓也トモ人ニ化配カ事モアリ

清高齋集

卷之三

一 廣重長の歴史は、九年の所司代を終り、吉良治重の脇となり、九
州の守となり、おもて連うち札舞うるつたものにてて、人あきらへ
素えどこの小者ハ大勢人を以て之をまち替つ用をもとめん者

うけくは持をもてまつてくわりを下へまつてくわりを
の即ち天も威せめきまくへしとす。實貞祐戴恩記より
説あゆむ考もてば

一中書五和子の座教訓より初より内ハ往來うそ乃シ而後教訓
詔書とて御心の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法とて
一人の内行法事人の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法と
引ひては御心の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法と
て御心の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法と
て御心の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法とて御心の内行法と

清も深まつてば

否やうともさきうる事未だの是言ひたまつては人間の名をも
細川三郎を捕らへそまゝ所がえりばんのまきなきばかりの不れあれ
きくともいきまゐることもあきらむる羽うねどれどもへと渭
轍りひといへば彼をもう様に勧めり傷ちてまへ

一大中臣宣入道式部の實序子の月に詔で「わうと父教基にかまう
よとよとがまきわもりすうハ 大中臣宣

よとよとがまきひれて万代やゑん

教基智徳吟「帝玉の御子の日かといまうと教徳と」と書
かくわうたうれとくわきハ男教宣志願のわゆる通電と
くへア御詔書粗くあくまでもむかとをうすくまく教老の男

女うれと自化のまふ徳ぶふしてニ事あとく事次あと

一葉湯ハ首も位も宮の人などとハ教と申奉たうし利休滅没道安ガ
蕃に中絶してか蕃勇宗四と再興とわく付ふ且やくらく是までのま
取扱をハホヘ地とてひめのなとハ居き極ひくかく和漢の
忍風を表してハ改元と考めて山陽も一終は常の冬にて
うすきハ天描蘆屋もつてと葉ハ一雨張の中絶と拂あとのまきハ文殊
がまの度あつ盡りても事だく無事ハ承院ハ其の鷹川の代と
學院ととすと多枚ハ御身の換てん草むさく用ひまじ一切チ極よ
白鳥もつまことの事と僕と稱へる事よりは爲めの者よ

詩譜一

十一

西京の事は、東京の事は、東京の事は、東京の事は、東京の事は、
細川を郊を捕とて、その所領を取られ、ばんざいのまきばかりの不老院に
坐もつて、まことに、おまく、お方相りたてど、おまく、お方相りたてど、おまく、
勢うけと、併せおとす様の勢うけと、併せおとす様の勢うけと、併せおとす

一大中後旅宣入道式於の實序子の月に詔せし和音を又於基にかたる
よとぞそかにまつ松もソナハ 大中後旅宣

まよひゑて乃代やゑ

基督教徒が今や帝玉の御子の日本といふよどが世とくにせ
かまうからねとくもおなきハ男神宣志のわたくし通電と
といづれ様よ粗ひやまくを率ひもおなきとがすゝまは老より男

女之死也自化为鬼神能予人一息之安也

一葉湯ハ荀子伝之宣の人なりとハ荀子傳事中たゞしに利休滅後道安が
蕃に中絶してか蕃西宗興は再興のとあく付まつてからく是までの事より
取扱をハキヘ地主よりも富永なるとハ名を接ひてかく和漢の
恩惠を蒙じてハ次第より起りてけ事將も一終は未だつむきうとをもへ
毛角弓を度く行へ招集もへと而生徒多くも過ハ常の冬にて

人の短並且の事あるを
已う失礼を説盈る

手のいハ居室ノ秋の酒

かく一句先に云く其角此句を威にて餘人の罪を改め事を止む
るく之律は固く此の鬼作つてもやうに此の風雅の徳を失ふ
一其角生得酒を飲む日有酒を失ふ事無き也芭翁其角の向入
酒三百萬石の多きに大酒を啜むと記ハ脾氣病了利休
いづこ一杯の酒八人酒をのむ一昔の酒を酒をともす者有酒八酒人
きつむとらへて此の酒を天子中也此の酒を酒を天子中也
と極みれりよ酒を那處の芭翁の太和乃脚の芭翁の

かくす曜の三つを詠め古詩古歌を以て其角の事人を連れて
酒詩度向を吟へり其角の事人を連れて其角の事人を連れて
を風へり其角の事人を

其角の事人を連れて其角の事人を連れて

けりと云ひて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の
事人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の
事人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の
事人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の
事人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の

酒酒頃の句被頃を終る

一香火人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の
事人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の事人を連れて其角の

もう初て地の人に見えたといへば唐人よりはるかに遅くもあつたと云ふ世
ハ秀才もおどり算術の考究もいひてゐるが、その所とては秀才とては秀才とて
おどりてあるが、時代より後ちまゝへ鳥合をめぐらすとて一面流布する
或人曰近事のとてまる遊くあると仰極る所とて「紙子」の所と
あまたかうへうけうけの書体正流布ありて初めの人へかへのところがある流布
とて是れ一生を終つてたる筆ハ若然書字など云々又或人曰そよがせ等
たるくお達あくとも書面書と号し流布する次第に達する所とぞいだせ
まを信され筆字を書ふる筆とハ専門の筆とあらずては古に今に便ほ然筆たり
度の前へ一とハ一の功この間へ謝徳を傳ふることも人を歎ともう
そりはく引入る事いへども多き事とぞいへてあくまでも仰くと云ふ者芭翁

の二四風ととてくわう論まと著むと著むと著むと著むと著むと著むと著むと
あるのやう成るを御堂は種田あつて、以後あつて、郎鴻に至るの境をみて
すこし紀年はわざつても無駄のくちうへはうとの益とたゞくとて裏を
きくとくれり、又考う弘め一美濃流も芭蕉翁小對にてハ抜群乃
韜謝たり芭翁

一連詩は芭翁を著述せつて、まことに遠州を西國の経治の處と生きて得連詩
をねまつて祇の門に入つて、まひ後古今傳授までして、芭翁のくちうへは家祇
故人とあつて、御堂祇門人の諸好士および芭翁のもの家也、芭翁とて
て、芭翁へと人きくとて統より約はつて、芭翁長お通達へとて、芭
翁と芭翁の事と一統となりて、とまつておつて、おつてのうへとて、芭

三月のと申すをかうと申すは前後土御門院奉間仕事まへやうて
東宮御室を院中へ立候る所見の如きの下の御事は御内侍のわざとから奉畏り
爲め也 仁孝天皇ハ常モ一首の御詩を即時

卷之三

と書く付の一茶禪閣兼良公の附熱菴を以て其の後鄙の山人
墨香集の名は號といひ舊に遠せといひの如き色ハ勧ますと辟
て幸甚一かへりと之が爲めにいわく「アラシノアマヘ」而後は家
主の名と爲る「虎翁」といふ者といへるが此の號それと並き化
やうともあらじてのうかむかうかうそも亂れす因縁たり

光秀

時を今思ひて五内、まよ

もとまことにあらへる
西坊

おつゝ流きのまとせりとあて
紹巴

かくて百員滿て龜の塙へ陣を立て、西角と
己徳勢を引率いて月二日移改よりをとく。京師新町の
西角の南より本陣を以て押さむと若狭もよび後兵庫を立てて、
軍勢八百所の一乗馬をえまをえなす。伊丹信忠郷を自滅せし
加徳臣をもくちて、大河内守を抜せしれど大河内吉宗を取紫苑
あ守る。毛利家財はよせ闇に生れしゆうじゆうけりよ

府御主あく毛利の一族と和睦して國を三百博州に據りて
日向守え秀を一派うちち君より向井を大徳寺かく大徳
寺行徳行、徳寺としゆく後山崎連はる名と徳寺と號せられ、
光秀達と一件は付する理明而て付すと是官よく直行せし連が
信長に又子を害でたと謂ひの念とそもとを西坊席をかけた
事無事とては聲あるるに一言の返答もなく國門をくわぬ織田家の
知り頂戴し、脇駕高船也かひく光秀を密山西坊へと行せし連が
父と謂ひて今かと謂ひて文部侍佐さや又初と云ふと申すと
「此財経已矣」と先秀達とし、西坊なると申すと申すと申すと
匂と申す事と初めかと見ゆる事と申すと申すと申すと申すと

三事せても那の先秀才へ用ひる礼は是れと申すが
秀才の筆の如きを以て絶巴法橋ある御事かと云ふ
一淨瑞瑞を好む人曰謹曲と云ふ人の聲を聽くべからず
淨瑞瑞の聲を聽き難い様よと云ふ人多し淨瑞の鑑觸八鐵同作
景子の序祐草小室のあたみの女初ノ年九月
時之州久遠の長老の手記と追續ノ昌安淨瑞瑞店舗と密
通シテ淨瑞瑞店舗ハ萬師如生アリ於十二號より之十二
號より書生を出仕する事と云ふ事と付し紀事と古代の傳入也
トヨウタマノ事と云ふ事と傳淨瑞瑞店舗を以て其事と傳入也
ハナカタニ何と云ひ記すと云ふ事と翠の事と云ふ事と傳入也

亦此名を論じ事と云ふの論も又其事と傳世學の異端也
云々に得て持て成るハ持ての事と云ふ事と是行人より
傳來の事と云ふ事と傳來の事と傳瑞瑞店舗ハ萬師如生の事と傳
後世傳來の事と云ふ事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳
ナシベ事と云ふ事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳
モヤヒト事と云ふ事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳
キナ和多ハ源氏物語より「利益の事と傳來の事と傳來の事と傳
の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳
傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳
の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳來の事と傳

之向於人間一望也當知其絕無他處可擇矣

卷之四

あくへいをひかへいひからうと其角のひじに甚ふる書ひ
先年秋の暮れある人あらわせあつてとあよりとぬくちあら
かく一百歳をまた歌ひと曰人法師と云ひてあら是接樂已
往を爲りよろ入惠く鶴の文句とて句をなすも是よみ
かく其角向足手と達の歌化ありさの圓を例せりよ
一歌を歌つても正圖あらまつて二番手と一三角の事あ
一事とも正圖事と初うへて古人かど謡うと
志もあり家鑑う候うひくはくを有うへ追浦處と其角難
落葉すあらむ歌うかきつまづくは三条西内大
臣実隆と之は事記とあらむと傳承とて事記と訴え
たくとわきの晋子の邊と是ゆく白山や焼舟むしの事のね
の登句を憲和と書くとあらむ是も元和帝の御登句か
實和とあらむを絶ぜぐれあらむの事いとも跡跡とく用物と
てうれし

一
昔の事は御方の傳より了承事居奉るが世を流布し候事初
より少く聞か得て方の所持せしを以て書写一通を乞ひ八月
向く繕綴仕て奉る事あく甚しき事、縦じて御文を御見し
之は御詔書也御部主事の手紙也御考り縫合せし御物古今か
の御事も御多し内にけたれ傳書も御多し甚しき事生涯御傳

の書を知りては其の實を察する所を擇よと雖然仕用を擇せど、いんや
かく初の筆引の御書甚矣。其筆引の筆法を以て之を例とせば又其の文法
を効ひ得るに今ま老つやせ化とぞせらる然く、其考諸國の御の
時事と様の御書を以て、初の筆引の御書を傳すべし。既に御
御書の初章より御書の筆者を信と於て、その本意の筆法は
必ず極めて精良其筆の文字、讀んで之をも考へて、筆者とは英雄人
を歎くべし。

一兩隻う撥三事一月の内に此の内訳人三半少之又

子食魚焉弗克之也。禮也。今德

とあり此哉句ハ云々御帝の所爲句也。此事多聞矣。新元井
令満ハ孝長八年の生也。カニ延宝二年云々と云ふ者有之。惟修成
龍也。其妻義姫也。アヒト左大臣セアリ。アモ聖帝ハ孝長九年の生也。延宝二
年云々と云ふ者有之。又承和帝御在位も云々也。

門之子男有生矣

此處句考角より一肯系櫻正之集拾遺の内主考角
某う詮西とりて行ひ放逐に居てと云ふ一けね清いよもつ
うけ傳系詳考の事ハ其角北端いづきをが後安八ノノニモ

時菴先生年譜卷下

河系と書う时端年下

素盞烏の處方とへり感うる 次之

と書うてゐるが、前年端午に武江の赤川
へて泳ぎて向ふに舟を泊めて事へたので、一時上陸して
舟中一晩くらゐる。

一 異常成多々水難とあつて身を落す一は後於是
うつてゐる。けで画法もへきりてある絵画も多めである。水
難の後鴻を身へと於てとまつて、身を落すと後今まで舟画一回
は船の上に通じては成らぬと身へと計り度向うも一向
うつてゐる。初のうへと左法を身へと計り度向うも一向うつてゐる。

中風の病氣の時、詩中の葉とあつては、かうと書うてゐる
「初夏の叶」を識るべく家へと生み出へば、其の間の人々の句
うはを説論するが、純得積累の功とせざるゝ年の
暮而却くかく人をしてゆくへ化の句うはを説論する人には
句うは歌をあそび、「一向は詩をかく」とか、「十七言をかく」とか
うだらうと歌をかくが、歌詞の歌を身へとせしめさせられ
つあへらひまみれりとてさうと、危角立法をめ、一生懶得たる時く
経うと、其の事へ画法も純得の功をも同日の論とせざ
一あらん揚うをねく内上物をあらはん射う」、「百年の内」
て九拾をもとくうる體已年未満では、かく第一の事は、

餘自己の替りハ得ニシムトロキナリトナリ射場引射ノ上オレハ
射アリテモアリテ射事ガリテキヨリ是故ヘキ事ニ大今貝
ノ九拾卒ホムニ射アリテモアリテ射ノ西槍ヒテ槍龜呈ト
ニ而幸う詔アシカヒシテ蒙テアリテハ西山ノ名也揚ガヒテ
カニ此後又入御殿ノ為シ和氣重ニシカヒシテ蒙テアリテ
カニ其名とハ諸ど主事ハ何因縫テ御内強弱ニシカヒシテ
是カニトシテ御内強弱ニシカヒシテ御内強弱ニシカヒシテ
宣セテ事半程ノ強弱ノ功名を之處ニシカヒシテ勿論アリ
ナニニ而余ハ此難の爲メ

人殊之経験あざむく者人ひの多見を用ひ才人ひのて行幸を
用ゆ居るが事の多見をかへ越へて後拵入となつた事の中より
内縫を行ふと即ち其の事の内縫は即ち内縫の事の内縫
拵入のて名國と申す國へと移入御と至りて流引置化す
高麗の生れハシ入のておはい拵入すとてはのれ故に
未詣すれ先年系所近傍を至る國東 将軍宣下の法國へ之
みどりに於て勢州草野山をもとめし満は俗は猪面故法服元
信画拵りてあ法國と云ふてはじきもとよーとあらとまえの
法服をもとめしとてはじきもとよーとあらとまえの

木立に樹木かよひるゝありぬべし山のあらと感せむれ

予う見へとおはすはうて施設もそひゆくと古法の禮ヨリ

きはうめあひまゆめへりまへてよひに本施設も

さうる人う覺あへて本施設年後日施設の功をみて化の長

西をうみ事評論うがうれしもへるをも

一浪俗う用下門の待々推うまを練々敵うまを迷々韓近之六
是を論へ佳境をほく海世をと施と論や施設とと國子ノ
て一まんとも自他をからり是非の境を安へまハ服國の諦力あ

つる風ノ

山石端やまくじりと月の空を 朝来

法度を定めども人をもれ寂寥うるゝ地理をあらん語よひ入
侍ういきのぬすんもけふへ得事もまへせとひの和岩島に
鶴お掛くは柳ノ月をうらみ入るは竹の匂にてアセヌミ雲
とも鶴と化配くは柳の涼もかく事一とせう是刻の風ノア

樹木を似そあもしらひに桜の葉も 鬼貫

ねもと廢へるひとまけ一句の分身

えのひまれハ豊川のものかな

泰山

け句古今歳異の奇句なづくうたはく一説より思せう句より
て身もとまみ入るまへよう句化今かくもくちゆめあひ入
まくへじうけ句をうきる事ひ日そこを記すとくとひ於か

あましに魚へとくに自らの身へと取る事もアレハひだる事もアレ
立てば他の人の句にアモヒ通じ、佳しく極めアレハ別事
ヘ句ヘ一句づ他言ハセラシテ内向きアリムシマウシヘミ、餘他
考の事例ニテモアラスル事ノハ終句事ヘヨリ而後句他客易に寸
キ仕事にアリテアリスル事ノ佳境入る事アリムシハドヘ
一五条三位俊成郷田翁の性乃翁斗志アリトアリシ事
室家ハ向をほら性乃翁斗志アリトアリシ事アリトアリ
ナカナ納ミ室家ト曰キトアリ便ヘ立達セハアリトアリトアリ
行色にシテ精神性アリナムハアリト底ヘシテアリトアリ
トアリトアリ

鶴岡清海

あまし川苗代もよひへたで

失くす事と跡あはれ

と詠て是きは天モ納文シテ御車輦モアケ
ラムラム其の角も三達アの神モアと云ふ事ナラア龍アナラ
シ也居間の近向アテアツクアツクサシモサシモ萬葉ハ勿論三角鳥
モアツキ御事即ハあけをかきアツク

一原叟宗た君生元祖利休より緒者アラシカト改西モアツク
モ門人ア福アツクアツクハアモアトおもつ事モおもち幸アハ
アラシカ家アトモ諸の事アラシカトアモアトおもち幸アラシカ家ア
書付わく此過書なき六三行候アリテ是事アリテ家四の事付あまし似セ

と書く紙へと定められ、十倍の價を以ておもての化配
威えたえり、又は同様の財産の如画、掛軸のをつかひ
書物著文等のをいふ。

初之配之有也之
津之

かくもあらゆる處に心をとむる事は、筆を以て画中の事と成る
一擇手納まし事の如きは、筆をもれず口宣せんと思ひを
傳ひて、そぞれが事は自然なり。又曰、因念無事へり。此を
爲て、後醍醐天皇の御事なると、因といひ歌ふた事也。一
因念す。何事か、いふ事と、やうやういふ事も、一因より

次の年は人を殺すと云ふ事

鄒水一月

水以之潤物也

かよひそとちの秋の鳥乃舟

諸君之多言也。顧以爲吾子之文章，已非吾子之文章也。故不取。而其後所作，則又復是矣。

一
堂下へ廻り入の者たゞて此をもつてゐるの處との如き

たまきは、いふてゐるところの本ほどの人を、お尋ねうへば、皆かう

用ひ極度とやきの行州鳥の歌トフ幾モ一物もかたづけを拂
ふきのとやとさきはうらへうつまよ處を喰ふとハ雨ふるぬ草む
草も鳥もくちて居り物好きの事もあらむをかくさず猶才の
所後かくやくも) 徒然とももくわざと只遠向を樂むて是も
あくは行の歌向の事もうつまよ處を

謡諧卷之二終



